



皇女の 霊柩

内田康夫

講談社
文庫
★



講談社文庫

皇女の霊柩

内田康夫

講談社

|著者| 内田康夫 1934年東京都生まれ。CM製作会社の経営をへて、『死者の木霊』でデビュー。名探偵・浅見光彦、信濃のコーンボ・竹村岩男ら大人気キャラクターを生み、ベストセラー作家に。作詞・水彩画・書など多才ぶりを発揮。1983年から住んでいる軽井沢には「浅見光彦倶楽部」もあり、ファンクラブ会員は累計2万人を超える盛況ぶりである。2007年3月に、宿泊施設「浅見光彦の家」がオープンした。2008年第11回日本ミステリー文学大賞受賞。2010年、作家生活30周年を迎えた。最新刊は、『遺譜 浅見光彦最後の事件』（上・下）（角川書店）。

こうじよ れいきゆう
皇女の霊柩

うちだ やす お
内田康夫

© Yasuo Uchida 2014



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

2014年10月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——中央精版印刷株式会社

製本——中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277912-8

目次

プロローグ

第一章 寒冷前線の夜

18

第二章 木曾街道馬籠宿きそ まごめ

58

第三章 和宮の祟りかずのみや たた

92

第四章 人類学研究室

139

第五章 接点

165

第六章 名誉教授

195

第七章 母の秘密

227

第八章 悲しい青春

259

第九章 着想の交差

293

第十章 消えた画像

327

第十一章 草生^むす屍^{かばね}

359

第十二章 埋葬された真実

402

エピローグ

442

自作解説

446



講談社文庫

皇女の霊柩

内田康夫

講談社

皇女の靈柩

目次

プロローグ

第一章 寒冷前線の夜

18

第二章 木曾街道馬籠宿

58

第三章 和宮かずのみやの祟りたた

92

第四章 人類学研究室

139

第五章 接点

165

第六章 名誉教授

195

第七章 母の秘密

227

第八章 悲しい青春

259

第九章 着想の交差

293

第十章 消えた画像

327

第十一章 草生^むす屍^{かばね}

359

第十二章 埋葬された真実

402

エピローグ

442

自作解説

446

プロローグ

1

濃尾^{のうび}平野を木曾^{きそ}川沿いに遡^{さかのぼ}ると、平坦^{へいたん}路の最奥が岐阜県中津川^{なかつがわ}市。そこから先はもう木曾路である。かつての落合^{おちあい}宿から右へ、国道一九号と分かれ、旧中山道^{なかせんどう}をしばらく行くと、斜面の中腹辺りで視界がひらける。純日本風を模した大きなドライブインや土産物屋が建ち、広い駐車場もある。目の前には、胸突き八丁の石畳の坂道が、ほぼ一直線に、はるか峠へ向かい、その両側には、宿場らしいおもむきの家々がひしめきあうように並んでいる。ここが木曾路のとつかかり、馬籠^{まごめ}の宿場跡である。

明治二十五年に、馬車が通れるように、中山道に代わる新しい道（後の国道一九

号)が木曾川沿いに作られると、馬籠宿は隣の妻籠宿つまごとともに、宿場としては廃止される憂き目をみた。馬籠も妻籠もその後、大火などもあつて凋落ちようらくの一途を辿り、住民の多くがこの土地を離れた。

しかし、このことは馬籠、妻籠の近代化を遅らせた反面、古い民俗をそっくりそのまま残し、観光資源として脚光を浴びさせる結果にもなった。とくに妻籠は早い時期から文化財保存の動きを見せ、昭和五十一年に全国で初めて、重要伝統的建造物群保存地区に指定された。古い家並みはそのままの状態で保存することが義務づけられ、電柱は集落の裏手に移された。おおげさにいえば、石垣の石一つ、一木一草にいたるまで、みだりに移動させてはならないとされた。

国鉄(現JR)のデイスカバー日本のキャンペーンもあつて、旅行ブームが到来すると、妻籠宿の古い町並みに観光客の人氣が集まった。妻籠・馬籠——と対ついのように言われる二つの旧宿場町だったが、妻籠だけが繁栄を先取りした恰好かつこうになった。妻籠は長野県木曾郡南木曾ななぎそ町、馬籠は長野県木曾郡山口村に属している。山口村は文字どおり、中山道を京都方面から来て、木曾の山に入る口という意味からのネーミングで、中津川市と境を接する。

馬籠はもと馬籠村であつたのが、明治七年に湯舟沢村ゆふねざわと合併して神坂村みさかとなった。ところが、昭和三十二年、神坂村に岐阜県中津川市と合併しようとする動きが起こつ

た。地理的にいっても、峠の西側にある神坂村は経済圏が中津川に属しているのだから、そういう気運がおこつても不思議はない。

しかし、馬籠地区はその動きに真つ向から反対した。馬籠が「信州」でなくなることに、危機感を抱いた。あの島崎藤村が「信州の藤村」^{しまざきとうそん}でなくなつていいのか——という、悲鳴のような主張が馬籠全住民を団結させた。結局、総理大臣裁定によつて神坂村は二分され、馬籠側は隣の山口村に編入されることになった。

馬籠は島崎藤村の故郷である。火災のために生家は失われたが、その跡が藤村記念館になっている。妻籠の繁栄には後れをとつた馬籠だが、村おこし町おこしの風を受け、藤村記念館をはじめとして、かつての宿場町のイメージをあざやかに再現した。『夜明け前』のモデルになっている茶店や旅籠^{はたご}、民家などがきちんと修復され、あるいは新築されて、中山道の往来が殷賑^{いんしん}をきわめた当時の馬籠宿を美しく蘇^{よみがえ}らせたのである。

妻籠が古い建物や文化財を古いまま残しているのに対して、馬籠は徹底的にすべてを新しくした。きわめつきは宿場を貫く道を石畳にしたことだ。道の端から端まで、隙間なく石畳が敷き詰められ、妻籠の味気ないアスファルト道路に圧倒的な差をつけた。妻籠の素朴に対して、馬籠は作られすぎたと批判する声もあるが、快適さという点では観光客に人気がある。とくに雨降りの日など、泥しぶきのはねない石畳道に